

# 岡本かの子『鮎』

——ともよの〈孤独感〉——

近 藤 華 子

岡本かの子『鮎』（初出『文芸』一九三九・一）は、かの子永眠の一ヶ月前に発表された。テキストは、鮎屋を舞台に看板娘のともよと常連客である湊との交流が中心に描かれ、ともよと湊をめぐる現在の物語に、湊がともよに語る過去の物語が挟まれた構造になっている。同時代には、湊の姿に「滅び行く東京人の一つのタイプ」<sup>(1)</sup>、「虚無」<sup>(2)</sup>を見る読みが主流であり、戦後も、かの子文学最大の理解者とされる亀井勝一郎が、湊が衰亡する旧家に生まれたことから、テキストのテーマを「旧家の頹廢」<sup>(3)</sup>と規定し、それが定説となった。ともよと湊は共に〈孤独感〉を抱えているにも拘らず、着目されるのは湊の〈孤独感〉のみで、ともよの〈孤独感〉は看過されていると言えよう。唯一、ともよに着目した呉順瑛氏も「孤独において、湊に相似したところがある」とし、「湊の語りはともよの存在なしでは果たせなかった」<sup>(4)</sup>と指摘している。同時代から湊中心に読まれることは変わらず、ともよは「飽くまで傍観者」<sup>(5)</sup>とされてきたのだ。

これまで、ともよは湊の語りの聞き手、湊に視線を向ける傍観者として位置付けられ、彼女の内包する〈孤独感〉は湊と二重写しに解されてきた。本稿では、ともよと湊の〈孤独感〉の内実の差異を明らかにし、テキストをともよの物語として読むことにより、テク

ストの新たな可能性を探ることを目的とする。

## 一 〈孤独感〉の共鳴

湊は、ともよの家「福ずし」の客の中で異色であった。「先生」と呼ばれ、店主であるともよの父親も「しぜん、ほかの客とは違つた返事をする」。ともよ自身も、「初めは少し窮屈な客と思つてゐただけ」であつたが、交流を重ねるにつれて、特別な存在として意識していく。湊が、「一度もその眼を自分の方に振り向けないときは物足りなく思ふ」ようになり「自分ながらしらず／＼湊の注意を自分に振向ける所作」をする一方で、「そしらぬ顔をして黙つて」みたり、「つんと済して立つて行つて仕舞ふ」などと素気ない態度を取ることもあつた。店における湊の挙動も氣になつて仕方がない。酒を飲んではいけない体の湊が他の常連客と盃のやり取りをすれば、「もうよしなさい」と盃を「ひつたくる」。それは、湊の体に対する心配ではなく、「妙な嫉妬」に起因していた。次第に湊が「妙な氣がかり」となつてきたのだ。「妙な嫉妬」や「妙な氣がかり」を抱くともよは、明らかに湊に惹かれているわけだが、「妙な」という表現から分かるように、その感情が何であるのか明確に認識してい

ない。

ともよは、鮎屋にくる客を「自分に軽く触れて慰められて行く」存在と見做していた。そして、客たちはともよから受ける「仄かなあかるいもの」を「自分の気持ちのなかに転じて笑ふ」。ところが、湊は笑みを提供する側であったともよに微笑み掛けるのである。湊は常にともよに笑顔を振り向けた。目が合えば「微笑」し、自分の注意を引こうとするともよを見ては「微笑」する。またひどい剣幕で食ってかかられても「苦笑」し、そしらぬ顔をされた時でさえ「明るく薄笑ひ」を浮かべる。湊に微笑み掛けられたともよは、「父母とは違つて、自分をほぐして呉れるなにか暖味のある刺激のやうな感じ」を受けた。

ともよは、父母から「自分をほぐして呉れる」、温かい充足感を得たことが無かった。表面上は「比較的仲のよい夫婦」だが、「気持ちはめい／＼独立して」おり、〈孤独感〉を「染みつけられてゐた」。さらに「女学校時代に」、「孤独な感じはあつた」と、家だけでなく学校においても〈孤独感〉を抱いていた。「学校の遠足会で多摩川べりへ行つた」挿話が語られるが、一人「小川の淀みの淵を覗」き、魚の往来を眺めるとともよの姿には、〈孤独感〉が漂う。家では父母と、学校では友達と距離を置き、「孤独的なものを持つてゐる」性格となつたともよにとって、湊は自らが常に内包してきた〈孤独感〉を「ほぐして呉れる」唯一の人物だったのだ。湊のともよを「ほぐして呉れる」笑顔は、ともよへの憐憫の情によるものだと考えられる。湊は、〈孤独感〉を宿すともよに自らの少年時代を見ていた。実は、湊もともよ同様に、「家の中でも学校でも」「別ものの扱ひ」される孤立した少年だったのだ。少年時代の湊は、「とき

／＼、切ない感情が、体のどこからか判らないで体一ぱいに詰まるのを感じ」ていた。湊の体に充満した「切ない感情」とは、〈孤独感〉に他ならない。

両者は、単に〈孤独感〉を抱えていたということだけでなく、それがもたらされた場所も「家」、「学校」と共通している。しかし、作品内時間であるともよの時代と、湊の少年時代では約四〇年間の隔たりのあるもので、それぞれが孤立した場について、時代の中で捉えていく必要があるだろう。テクスト内時間は昭和一年から一三年で、日中戦争直前期から戦争下にあたる。戦時中の方針は、「家」や「学校」に直接反映される。昭和二年五月、文部省より発行され、小学校から大学までの各学校に配布された『国体の本義』に顕著であり、「国民の生活の基本が家」、「家の継承が重んぜられ」とある。戦争勝利のために、政府及び軍部によつて「家」という制度、家族という集団の組織化が強行に進められ、家族国家観が強められた。また「国体」が「我が国教育の淵源」であるという思想の下に、個人主義は否定され、戦争への総動員体制が図られ、「皇運を扶翼」することが精神理念とされた。ともよが「学校」で受けていたのは、国体明徴が強調された教育である。

湊の少年時代の教育はどの様なものであつたのだろうか。湊の少年時代は、「五十過ぎぐらゐ」と設定されている湊の年齢から、明治二四年周辺と定められよう。明治二三年一〇月には、教育勅語が發布されている。先に見た『国体の本義』で強調されている「皇道の道」は、「教育勅語に示された国体の精華と臣民の守るべき道の全体をさす」とされており、両者の受けた教育は時代を越えて一続きとなつている。教育勅語発布の前年には、帝国憲法の施行、皇室典

範の作成がなされており、天皇は国民の家父長であると考えられる家族国家観が強化されていた。当時は、明治民法の編纂期にあたる。明治民法の目的は、「家」の存続にあり、家長の絶対的権限を規定し、家督相続のシステムを温存する封建的家族制度を踏襲するものである。

ともよと湊が共に孤立した場「家」、「学校」を時代に位置付けられ、湊は天皇中心の家族国家観の基盤が整備された時代にあり、ともよは十五年戦争下の国体明徴の時代にあり、両者ともに家イデオロギーがとりわけ強化され、それと軌を一にした教育がなされていた点で共通することが分かる。

ともよも湊も「学校」で、周囲に馴染まない特殊な生徒と看做され、問題視されたことで〈孤独感〉を抱いていた。ともよは、「男に對してだけは、ずばずば應對して女の子らしひ恥らひも作為の態度もない」という理由によって、「教員の間で問題になった」。「女の子らしひ恥らひ」に欠けることが「問題」とされたのは、当時の「婦徳」の観念に反したからだと考えられる。昭和九年刊行の『婦人の心理と婦徳の基礎』<sup>8)</sup>では、「女子は男子に對して」、「遠慮深く所謂おじけて、なるべく避け遠からんとするもの」、「如何にも恥かしさうな、而かも愛らしい風情を示すもの」とされ、「女子に取て格別大切なもの」は「羞恥心」であると説かれている。戦時体制下、女性は今來兵士となる子供を生み、強い兵士を育てるという役割が担われ、良妻賢母教育が強化されていた。良妻賢母規範を補強する「婦徳」の観念も重要視されていたに違いない。ともよは、時代の要請に添わなかったがために、「学校」で「問題」にされ、〈孤独感〉を内包せざるを得なかった

一方の湊は勉強の「よく出来た」優秀な生徒であったが、肉、魚、野菜が食べられないというひどい偏食ゆえに、「食事が苦痛」で、無理に食べようとすれば「すぐ吐いた」ような腺病質な子供だった。湊が「あんまり痩せて行く」ことで、「学校の先生と学務委員たちの間で、あれは家庭での衛生が足りないからだといふ話を持ち上がった」。学業優秀の湊が非難されたのには、当時の教育改革が関連している。教育の三要素とされる知育、徳育、体育のうち、それまでは、立身出世の思想と相俟って何よりも知育が尊重されていたのが、ちょうどこの頃に転換期が訪れていた。明治二十三年、等級制が廃止され、学級制が導入されている。「知育一辺倒の学力主義的競争を弱める」<sup>9)</sup>ことが、目的の一つにあった。知育に偏っていた教育が見直され、体育が強化された。運動会が年中行事化したとされるのもこの時期である。学業優秀であっても、虚弱児であった湊は、時代の潮流にそぐわなかった。

時代は異なれど、二人に〈孤独感〉をもたらした「家」、「学校」、言わば〈孤独感〉の枠組みは重なり合う。さらに、両者とも「学校」で孤立していた原因が、時代の要請に合わないことにあった。

湊は、〈孤独感〉を内包するともよの姿に、自らの少年時代を重ね合わせたのだろう。湊の微笑みが、ともよの〈孤独感〉に共感し、それを慰めようとするものであったからこそ、ともよは自らの〈孤独感〉を「はぐして呉れる」と感じたのだ。ともよは、湊との交感によって自分を苦しめる〈孤独感〉を無意識に緩和していたと言える。

## 二 〈孤独感〉の差異

前章で見たように、ともよの〈孤独感〉は、一見すれば湊のそれと「相似」していると言えよう。しかし、その内実は決して同じではない。まず「学校」で孤立した要因が、ともよの方にはさらに他にもあったことを看過してはならないだろう。「いつの間にか」問題視されていたともよの「疑ひは消えた」。その理由は、「商売柄、自然、さういふ女の子になつたのだと判つて」とされている。教員たちは、ともよの家の「商売」が鮎屋であるから、「女の子らしい羞らひ」がないのは、仕方がないと納得している。教員たちには「鮎屋」への差別意識があつたのだ。なぜ「鮎屋」が差別の対象となつたのだろうか。このことにも戦争の影響が指摘できよう。戦時色が色濃くなるにつれて、物資節約の必要性から贅沢と無駄が固く禁止された。昭和一三年に出された大蔵大臣によるプロパガンダ「婦人の力で銃後は固し―貯蓄・節約は主婦の責任」<sup>10</sup>では、「生活のあらゆる方面に亘つて、この際特に細心の注意を払つて頂きたい。戦場に立つ兵士の気持になれば、どんな節約も我慢できませう」とある。婦人雑誌には節約記事が盛んに掲載され、街頭には「バーマネントはやめましょう」「一汁一菜」「享楽禁止」などの標語が掲げられた。そんな時流にあつては、贅沢品である鮎を生業にする鮎屋が白い眼で見られても不思議はない。そして、周囲の人間だけではなく、ともよ自身も鮎屋の娘であることに引け目を感じていた。

女学校時代に、鮎屋の娘であるといふことが、いくらか恥ぢられて（傍線引用者）、家の出入の際には、できるだけ友達を近

づけないことにしてゐた苦勞のやうなものがあつて、孤独な感じはあつた（後略）

「教員」や「友達」に異端視されるとともに、自らも「鮎屋の娘」であることを「恥ぢ」、友人と距離を置いていたともよは〈孤独感〉に苛まれていた。しかし、「鮎屋の娘」ということは、本人の問題でなく家の問題であることを指摘しておきたい。どんなに〈孤独感〉を払拭したくとも、ともよにはなす術がない。湊の場合、原因は自己の偏食にあり、不可抗力の下に発生したともよの〈孤独感〉とは決定的に異なる。

次に、ともよが〈孤独感〉を抱いたもう一つの場合「家」についてもみてみたい。ともよの「家」での〈孤独感〉の要因について、先に、愛情の薄い両親との関係を指摘したが、それだけに留まらないと考える。「夫婦と女の子のともよの三人きりの暮し」とあり、ともよは鮎屋の一人娘であることが分かる。家督相続人として家業を継ぐという特殊な立場なのだ。当時のイデオロギーでは、「親を養う」という孝の義務は、すべての子に平等にあるのではなくして、「家督相続人が専属的に負うものとされ」「親が老後に家督相続人の世話になることは当然の権利」<sup>11</sup>であつた。ともよには将来的には親を養つていく義務があり、おのずと両親の期待が向けられた。「気持ちはいく／＼独立」している両親が「娘のことについてだけは一致したものがあつた」。彼らは、「自分は職人だつたからせめて娘は」、「教育だけはしとかなくては」と、自分たちの受けてこなかった教育を娘には受けさせたいと切望している。しかし、動機は純粹に娘のためというよりは、「まはりに浸々と押し寄せて来る、知識

的な空氣に對して」の「社會への競争的なもの」であつた。以上からは、家業の跡継ぎとしてのともよに對する両親の多大な期待が窺えるだろう。そして、「東京で屈指の鮎屋で腕を仕込んだ職人」の父親の手腕により「福ずし」の経営状態は、「職人を入れ、子供と女中を使はないでは間に合わない」い程、非常に良好であつた。父親は鮎屋の経営に情熱を傾け、「どこか下町のビルヂングに支店を出すことに熱意を持ち」と、家業をさらに拡大、發展させようと野心を抱いている。両親と、そして鮎屋を背負つていかなければならない一人娘のともよには大きな重圧が押し掛かつていた。

しかし、両親の跡継ぎとしての一人娘への期待や、父親の鮎屋経営に對する情熱とは裏腹に、ともよ自身は家業に對して冷めた想いを抱いている。鮎屋の娘であることを「恥」としていたともよの店を手伝う態度に、鮎や店への愛情を見ることはできない。店を出される鮎を見て、「飽きあきする、あんなまづいもの」と顔を皺め、常連客に珍味を求められると、「面倒臭さうに」探す。「店のサーヴィスを義務とも辛抱とも感じなかつた」とするともよは、「その程度の福ずしの看板娘だつた」。この言葉には、ともよの家業への想いが端的に表れている。ともよにとって鮎も家業も「その程度」であり、特別な想い入れはないのだ。両親の期待や父親の情熱からの隔絶は、「孤独感」を導き出すものであらう。

湊の家も、内容は詳らかにされないものの家業を営んでいた。そして、湊もともよと同じく「一家の職に」「氣が進まなかつた」とあり、家業に對する想いは希薄である。しかし、湊は、一人娘で「家」の跡継ぎであるともよと、家における立場が違う。「家族は両親と、兄と姉」の湊は次男で、明治民法で「男子数人アルトキ其先

二生マレタル者」(一九五一条一項)と規定されているように、家督相続の権利はなく、家を継ぐことはない。家における立場は、父親の息子への対応にも表れる。虚弱であつた子供の頃には、養育は母親任せにし、「人が振り返るほど美しい少年」へと成長すると、「急に」「興味を持ち出し」、遊びを教える。父親は、湊を家業の継承者ではなく、「い、道楽者」へと仕立て上げた。父親の子への想い入れだけでなく、湊の家の家業が「没落」していた点でも両者は対照的である。

繁栄している鮎屋の跡継ぎのともよと、衰退する家の次男の湊では、果たすべき役割や、家長である父親の期待も全く異なる。「家」におけるともよの《孤独感》は、「家」での立場や両親の期待に反して、「鮎屋」に情熱を注げないことにあるのではないだろうか。それは、家や両親に逆らつていくことを意味し、家の重圧がない湊と同一に見ることはできない。また「学校」で陥つた《孤独感》にしても、要因とされた「鮎屋の娘」であることは、自身の力では解決しようがなく、湊の偏食のように本人の問題と捉えられることは異なる。ともよは、自分ではどうしようもない現実との間で葛藤している。その葛藤こそがともよの《孤独感》を形成していると捉えたい。たとえ枠組みは同じであつても、その内実を比較してみると対照性は明らかで、ともよの《孤独感》がいかに深刻で脱却困難なものであるかがあらわになるだろう。

ともよの逃れようもない現実とは、「鮎屋の娘」であることだ。つまり、ともよの《孤独感》の根幹をなすものがテクストの題名である鮎だと言えよう。二人が初めて鮎屋の外での邂逅を果たした際、「なにかいろ／＼訊いてみたい氣持があつた」ともよが、「何を云

はうかと暫く考へ、「とう／＼云ひ出した」問いは「あなた、お鯨、本当にお好きなの」であった。自己の〈孤独感〉を「ほぐして呉れる」湊が、その根源である鯨をどの様に思っているかを知ること、は、ともよにとつて重要な意味を持つ。

### 三 別離

湊の独白はテクストの中心を占めると言つてもよいのだが、話を聴いているともよの反応は全く描かれず、ともよが「傍観者」と定められる要因になつていると考えられる。語りに触発されるともよの心情を考察し、末尾における二人の別離の意味は読み解きたい。

湊は「家」でも「学校」でも〈孤独感〉を抱かなければならなかつた少年時代を回想し始めた。湊の悲哀を、ともよは理解し、湊から受ける「自分をほぐして呉れるなにか暖味のある刺激のやうな感じ」の正体が、共感であつたことを知る。さらに語りは核心へと及ぶ。湊の鯨の思い出に、ともよは衝撃を受けたに違いない。贅沢禁止の風潮において、「鯨屋の娘」であることを「恥じ」、「苦勞」を背負わなければならなかつたともよにとつて、鯨は金銭と切り離すことのできなないものだ。客たちは、「ちんまりした贅沢」を求めてやつて来る。父は商売熱心で、母は、「店の売上げ額から、自分だけの月がけ貯金」をしている。店で交わされる会話は「さんまちや、いくらも値段がとれない」、「おとつあん、なか／＼商売を知つてゐる」といった金に関係するものだ。店名「福ずし」の「福」には、商売繁盛の願いが込められているだろう。背後に金が見え隠れする鯨をとよは嫌悪していた。湊にとつての鯨は「母親のことを想ひ出す」ものである。湊は福ずしでいつも「玉子と海苔巻に終る」。

玉子焼鯨は、母が一番初めに湊のために握つた鯨である。偏食で腺病質の湊少年を救いたい母の苦肉の策だつた。鯨は、母の湊への「心配」と「愛感」が結晶化したものである。鯨を口に入れると「おいしさ」、「親しさ」、「欲び」が、「切ない感情が、体のどこから判らないで体一ぱいに詰ま」つていた「身のうちに湧いた」。これを契機とし、湊は「見違へるほど健康になつた」。湊は、母の鯨によつて、救済されたのである。「母親の手製の鯨」は、「贅沢」や「商売」とは無縁である。自分を〈孤独感〉に陥れ、悪感情しか抱いてこなかつた鯨が一人の少年を救つたと言う。ともよは、湊の語りによつて、鯨の持つ新たな側面を知ることとなつたのだ。

続いて、鯨による救済で〈孤独感〉の要因を克服した湊のその後の人生が語られる。「中学でも彼は勉強もしないでよく出来」、「高等学校から大学へ苦もなく進めた」と表面上は順風満帆に見える。しかし、内面は空虚なもので、常に「何かしら体のうちに切ないものがあつて」、しかも「それを晴らす方法は急いで求めてもなか／＼見付からない」と感じていた。湊は母によつて見出された光明を生かすことはしなかつた。要因が取り除かれたにも拘らずに〈孤独感〉を内包し続けたのだ。「永い憂鬱と退屈あそびのなかから大学も出、職も得た」。「憂鬱」と「退屈」は〈孤独感〉によつてもたらされたものだろう。「道楽者」に仕立てようとする父親に歯向かうでもなく、なされるがままに「い、道楽者」として生き、「勉強もしない」。大学卒業後には「父母や姉姉も前後して死んだ」ことで、次男である湊に家督相続の権利が生じるが、「一家の職にも、栄達にも気が進まなかつた」。ついに「生活には事かかない見極めのついたのを機に職業も捨てた」のである。湊は、結局は〈孤独感〉と

馴れ合い、周囲の状況に身を委ねて生きてきたに過ぎない。いつまでも〈孤独感〉を「晴らす方法」を見付けられずに、「憂愁」「諦念」を生きる姿勢とした。

湊の人生の顛末をともよはどの様に聴いたのだろうか。自分と同じく〈孤独感〉を抱える湊がそこから脱却し得なかったということは、ともよを絶望させてもおかしくない。しかし、ともよには少しも落胆の色は見えない。「あ、判つた」と納得しているのだ。ともよの反応は、自己の〈孤独感〉と湊のその差異を認識したことによるものと捉えたい。湊は「年をとつた」現在に至ってもなお、母の憧憬を追い、〈孤独感〉からの救済を求めている。現在の湊の〈孤独感〉は、無気力に、流されるがままに生きてきた「諦念」による結果に過ぎない。二で分析したが、ともよの〈孤独感〉は、自己を抑圧する現実との葛藤によって抱かざるを得なかったものだ。

ともよを取り巻く現実とは、より厳しくなっていくことが予想される。鮎はともよの〈孤独感〉の根幹であったが、ともよの未来を拘束し、「没落」させる可能性まで孕んでいた。鮎屋の未来は、決して明るいものではない。戦時色がますます色濃くなるにつれ、先にも指摘した贅沢禁止の風潮は強まり、鮎屋は実質的な被害を受けることとなる。昭和一四年には、鮎の命とも言える白米の禁止令が施行され、昭和一五年には、「東京の食堂、料理屋は米の使用が禁止され、オカラや小麦粉などの代用食となり、販売も制限される」<sup>12</sup>ようになる。鮎職人が一五年戦争下について、「戦地にひっぱり出されました」「握りたいと思つたつて、なにせ統制経済で材料がまるでない」「魚だつて配給<sup>13</sup>」と証言している。戦禍が激しくなれば、鮎職人であろうと当然兵士として召集される。そして、鮎には欠か

せない米もねたとなる魚も入手できる状況ではなかった。鮎屋の行く末には暗雲が立ち込め、その跡継ぎであるともよの未来には不安が渦巻いている。現在だけを見れば、鮎屋は繁盛しており、湊の家の家業の状況とは対照的であるが、この先は、湊の家同様に「没落」する運命にあるのだ。ともよは、鮎屋とともに時代に飲み込まれ、湊のように「没落」していくのだろうか。

従来言及されてこなかったが、ともよは湊から「自分をほぐして呉れるなにか暖味のある刺激のやうな感じ」を受ける反面、「まともにその眼を振り向けられ自分の眼と永く視線を合せてゐると、自分を支へてゐる力を暈されて危いやうな氣」も感じていた。ともよが、湊に「暈されて」しまふと感じた「自分を支へてゐる力」とは、つまり主体的に生きようとする力ではないだろうか。ともよは女学校において「自分を支へてゐる力」を培つたと考えられる。当時の女学校は、良妻賢母教育であつたが、「女の子らしき羞らひ」がないと「問題」にされていたことから窺えるように、ともよはそれを内面化してはいないだろう。むしろ、教育が本来的に持つ力の恩恵を受けていたと考える。ともよとはほぼ同時代に女学校に通つていた女性は、「水を得た魚とはこのことを言うのかと思う程に」「毎日がとても楽しくて、はりきつていた」「ひたすら待つてゐる毎日であつた」<sup>14</sup>と語っている。教育が本来的に持つ力とは、人間の能力や可能性を開花させ、具現化させる力である。生きて行くにあたつて「自分を支へてゐる力」を信じていたともよは、〈孤独感〉に捕らわれ、「憂愁」や「諦念」に閉ざされた湊に釣り込まれることを無意識的に拒んでいたのだと捉えたい。湊の独白により、〈孤独感〉の差異、すなわち生きる姿勢の差異を自覚したともよはうちに抱いて

いた湊に対する危機感の正体も知ることとなったのだ。

この日以来、湊は「すこしも福ずしに姿を見せなくなつた」が、ともよは「また何処かの鰯屋へ行つてらつしやるのだから——鰯屋は何処にでもあるんだもの——と執着しない。ともよにとつて、湊は既に「ほかの客とは違つた」客ではなくなつた。現実と向き合わず、「憂愁」、「諦念」の人生を送る湊は、「現実から隠れんぼうしてゐるやうな者」である他の客と何も変わらないということに気付いたのだ。

湊との別離によつて「ともよの側は一層深い諦念の世界へ戻される<sup>15</sup>」と捉えられてきた。しかし、ともよが湊同様に、「諦念」の人生を歩む、ないしは時代に飲まれ「没落」することはないと考える両者の〈孤独感〉は似て非なるものであり、二人の生きる姿勢には決定的な差異がある。湊は、「勉強もしないでよく出来」、「高等学校から大学へ苦もなく進め」、「職も得」、「頭が好くて、何処へ行つても相当に用ひられた」と、能力や境遇に恵まれ、自分の手でどうとでも人生を切り開いていけたにも拘らず、結局は〈孤独感〉を逃げ道にし、流されるがままに生きてゐるに過ぎない。〈孤独感〉に苛まれながらも現実には抗い、「自分を支へてゐる力」を信じ、主体的に生きたいともがくともよとは正反対である。そんな両者が同じ運命を辿ることはないと思へたい。テキスト末尾に示されたともよと湊の別離は、両者の生の軌道が別々の方向へと進むことを示しているのではないだろうか。

### おわりに

現在のともよの年齢と、湊が「結局的、道楽者になつてゐた」年

齡（十六七）は一致し、住む場所も二人とも「東京の下町と山の手の間目」と同じである。「十六七」という年齢は、少年、少女から大人へと成長する過渡期であり、「境目」というトポスは、どちらへも転ぶ可能性のある境界の位置にあることを意味しているのではないだろうか。女学校を卒業したが、「それから先どうするかは、全く茫然としてゐた」ともよは、人生の分岐点にいた。そんな中での湊との交感から、ともよは二つの気付きを得たと考える。一つは、湊の鰯への想いによつてもたらされたものである。母の愛が凝縮した鰯によつて少年が救済されたという事実によつて、自己の〈孤独感〉の根幹をなし、嫌悪の対象であつた鰯に対する想いが変化しただけであり、「鰯屋の娘」ということで抱いていた劣等感から解放されるのではないだろうか。もう一つは、自己の主体的な生の認識である。湊の〈孤独感〉の内実が「憂愁」と「諦念」に覆われた、受動的な生であることが明らかに、それとの対照によつて自己の〈孤独感〉の内実が照らし出された。家や時代など自分ではどうすることもできない現実との葛藤によつて内包せざるを得なかつた〈孤独感〉について、今後その要因が取り除かれるわけではなく、むしろより重く押し掛かつてくることが予想される。しかし、「自分を支えてゐる力」を信じ、主体的に生きることを確認したともよは、〈孤独感〉を踏み越えていこうとするだろう。湊との別れ際、ともよが湊に向けた笑いには、未来へと踏み出す契機を与えてくれたことへの感謝の念が込められてゐるのではないだろうか。

従来、湊の語りを成立させるためにともよが配置されたということとは自明のこととされてきたが、湊の語りは、ともよが未来に向つ



ていくために必要不可欠なものであり、ともよの主体的に生きる姿勢を導き出すものであると捉えたい。本稿では、ともよを単なる視点人物としてではなく、家にもジェンダー規範にも抗い、「自分を支へてゐる力」を信じている存在として前景化した。またテクストをとよの物語として読むことにより、「旧家の頹廢」、「家霊」、「滅び」といったかの子文学の定説の範疇に押し込められてきたテーマを、女の主体的生への希求と読み替えることができるだろう。

注 (1) 浅見淵「文芸時評」《早稲田文学》一九三九・二

(2) 十返肇「岡本かの子論」《三田文学》一九四〇・二一

(3) 亀井勝一郎「解説」《老妓抄》新潮社 一九五〇・四

(4) 呉瑛順「岡本かの子「鮎」論 鮎屋をめぐる二つの物語―湊の語り、ともよの独白」《学芸 国語国文》二〇〇六・三

(5) 宮内淳子「《泳ぐ魚》を中心に―『鮎』―」《増補版 岡本かの子論》所収 EDI 二〇〇一・八

(6) 鮎屋の常連客に「兎肉販売の勧誘員」がいる。昭和十二年二月に刊行された雑誌に掲載されていた「兎肉の知識と其の食べ方」(井舟静水『栄養と料理』)という記事に、兎肉は、「直接国防資材であり、戦線と銃後を充たす栄養食品」として「猛烈に奨励」されるが、「取引の商売系が整つてゐない」とある。「販売の勧誘員」がいたのは、一五年戦争下、軍需品の毛皮として、魚に代わる貴重な蛋白源として、兎肉の販売が促進されたこの時期であろう。また湊が常連客と「競馬の話」をしているのだが、公認競馬が全国的に統一されたのは、昭和二年五月に競馬法が公布されて以後である。以上より、作品内時間は、昭和一年から作品発表年月が昭和十四年一月なので、昭和十三年の間と定めることができる。

(7) 鈴木博雄『日本教育史』(日本図書文化協会 一九八五・五)  
(8) 雀部顯宜著。一九三四年九月北文館発行。

(9) 荒川章二「規律化される身体」(小森陽一他編『感性の近代』所収(岩波書店 二〇〇五・二))

(10) 大蔵大臣・池田成彬著。『主婦之友』(一九三八・八)所収。

(11) 川島武宜『イデオロギーとしての家族制度』(岩波書店 一九五七・二)

(12) 『毎日グラフ別冊一億人の昭和五〇年史』(毎日新聞社 一九七五・二)

(13) 内田栄一『江戸前の鮎』(晶文社 一九八九・四)

(14) 加太貴美子『私の女学生時代』(かのう書房 一九八九・一一)  
(15) 註(5)に同じ。

付記 本文の引用は、『岡本かの子全集』第四巻(冬樹社 一九七五・三)による。旧字は新字に改めた。

本稿は、平成一九年度全国大学国語国文学会夏季大会(於 二松学舎大学)における口頭発表に基づいている。